

〔学会〕 第 934 回 千葉医学会例会
第 3 回千葉泌尿器科同門会学術集会

日 時 : 平成 8 年 1 月 21 日 (日) 午前 9 時 00 分

場 所 : ほてい家

1. 後腹膜神経鞘腫の 2 例

市東哲夫 (沼津市立)

症例 1 は 48 歳男性。下腹部に小児頭大の腫瘤を認め、後腹膜腫瘍の診断にて腫瘍摘出。組織診で悪性神経鞘腫と診断。症例 2 は 54 歳男性。検診にて偶然発見され、内分泌非活性の副腎腫瘍の診断にて腫瘍摘出。Antoni type A, B の混在する神経鞘腫であった。後腹膜神経鞘腫の 2 例を報告し、若干の文献的考察をおこなった。

2. 悪性褐色細胞腫の 1 剖検例

中村 剛, 溝口研一, 川村健二
日景高志 (東京厚生年金)

症例 : 67 歳, 男性。1994 年 6 月 15 日右側腹部痛出現。腹部 CT 上右腎上極および骨盤腔に直径 6 cm の mass を認めた。その後血痰も出現し、7 月 21 日泌尿器科入院となった。入院時血圧は正常だった。尿中カテコールアミン 3 分画にて、アドレナリン・ノルアドレナリンの上昇を認めた。右胸水貯留が著明に認められるようになり 8 月 17 日死亡した。病理解剖にて右副腎褐色細胞腫及び腸間膜・肺への転移を認め、悪性褐色細胞腫と診断した。

3. 腹腔鏡下副腎摘出術

始関吉生 (千大)

腹腔鏡下手術は、低侵襲として急速に普及している。1995 年 12 月までに、精索静脈瘤、性腺異常、骨盤内リンパ節摘出術、腎摘出術及び副腎摘出術を腹腔鏡下に施行した。今回、腹腔鏡下副腎摘出術を報告した。初期の 2 例については、副腎を見出せず、摘出不能であった。摘出例は、右 3 左 1 例で、平均手術時間約 4 時間で、1 例のみ約 600ml の出血をみたが、手技に修熟すれば、開放手術より低侵襲の手術と考えた。

4. 単腎に発生し、超選択的動脈塞栓術により救命しえた腎動静脈瘻の 1 例

阿部 拓 (船橋医療センター)

症例は 70 歳, 女性。既往歴に昭和 43 年左腎出血にて左腎摘出。平成 7 年胸部大動脈瘤及び脳動脈瘤を指摘。同年 10 月突然の右側腹部痛, 肉眼的血尿出現し、ショック状態にて救急受診。精査にて aneurysmal type の腎 AVF と診断し IDC (Interlocking Detachable Coil) を用いて TAE 施行。術後 3 カ月を経た現在、血尿を認めておらず、腎機能は温存されている。単腎の AVF に対し TAE を施行したのは、本邦 2 例目と思われる。

5. 巨大水腎症の 1 例

鈴木孝一 (国立千葉)

機能的単腎かつ巨大水腎症を呈するが、比較的腎機能が維持されていて、腹部 CT では腎実質が 1 cm 程の厚さであった症例に対して、腎盂形成術を施行した。腎瘻造設後の腎盂内容量は 3000ml であった。

術前の DIP, CT では左腎は描出されず、右腎は正中を越える著名な腎盂の拡張が認められたが、術後の 3 カ月の DIP では尿管の造影を認め、腎機能経過は良好であった 1 例。

6. Milk of Calcium Renal Stone の 1 例

武田先子, 野村和史, 脇坂正美
(船橋中央)

52 歳, 女性。主訴は肉眼的血尿。平成 3 年 4 月 18 日当科受診。膀胱腫瘍の診断で膀胱全摘除術回腸導管造設術施行。外来通院中の平成 4 年 6 月の CT にて拡張した下腎杯内に体位変換により移動する上方に鏡面像をもつ半月状の石灰化像を認めた。症状なく、石灰化像の減少傾向みられるため外来にて経過観察中である。若干の文献的考察を加えた。